東北大学，新設富山医科薬科大学脳神経外科学 教室で過ごした日々

西能みなみ病院 院長
介護老人保健施設みどり苑 施設長 西嶋美知春

平成 30 年 7 月に古希を迎えた，65 歳で青森県立中央病院を定年退職し，脳神経外科の一線から退いて足掛け 5 年が過ぎる．今では毎日，認知症患者さんと暮らしている．ときたま手術の夢をみたり，東北大学教授 故鈴木二郎先生 (Fig. 1) や富山医科薬科大学学長故高久 晃先生 (Fig. 2) の姿が夢に現れる．そんな折，日本脳神経外科コンgres事務局から，シリーズ「温故創新」の原稿依頼が舞い込んだ (富山大学：黒田 敏先生，編集委員長：東京大学：齊藤延人先生推薦)．引き受けたものの，これまでの執筆者をみると，脳神経外科領域の重鎮ばかりである．執筆には少々気おくれするが，事務局の方から「内容はどのようなことでもよいです．先輩から後輩へのメッセージとして書いてほしい」と励まされた．そこで，自分の軌跡を振り返り記すことにより，後人たちの生き方への参考になればと思い，筆を執ることにした．役立てば幸いである．多くの人々と巡り合い，教えられ，助けられて今日の自分がある．

昭和 49 年，私は 25 歳で東北大学を卒業したが，所属先は転々とした．卒業後，東京医科歯科大学第 2 解剖学教室 (佐藤達夫教授) の助手として医師のスタートを切った．1 年後，群馬県伊勢崎市の脳血管研究所 美原記念病

院 (脳神経外科部長：水上公宏先生) で，脳神経外科医として出発した．その後，東北大学脳神経外科学教室 (鈴木二郎教授) で研鑽を積み，新設富山医科薬科大学脳神経外科学教室 (高久 晃教授) で約 20 年，青森県立中央病院で約 16 年を過ごし，現在に至る．ここでは，東北大学および新設の富山医科薬科大学で過ごした日々を，当時の脳神経外科学教室の風景とともに随想する．

東北大学時代 (27～30 歳) (Fig. 3)

私は，父の病のために，昭和 49 年に卒業後，故郷の東京深川に戻った．東京医科歯科大学で神経解剖 (萬年甫先生指導) の勉強を 1 年した後，昭和 50 年美原記念病院に移り，2 年半を過ごした．脳神経外科手術は肉眼的手術から microsurgery への移行期であった．病院には，日本で 2 番目の CT (日立)，3 番目の脳循環測定器が導入された．私はよくわからないまま，その担当を命じられた．水上先生は「脳血管障害の臨床—外科治療を中心に—」を執筆し，これにより第 13 回ベルツ賞 (Erwin von Bälz Preis) を受賞された¹⁾．論文の片隅に，私の名前を入れていただいたおかげで，私も名誉に浴することに

Fig. 1 鈴木二郎先生と海軍体操

鈴木二郎先生は海軍兵学校出身．復員後東北大学で医学を学んだ．毎週水曜日早朝に体操が行われた．このリズムになかなかついていけなかった．海軍体操の後には，研究朝会が始まる．私はずいぶんと怒られ，激励された．

Fig. 2 高久 晃先生（右側）と風呂

高久先生に拾われ、20年間、先生のもとで勉強した。何故か、先生とは一緒に風呂に入る機会が多かった。満州で幼少期を過ごし、会津で多感な年ごろを過ごされた先生には、燃え盛る炎の中で、辛うじて生き残った者のみがつ優しさがあつた。

Fig. 3 旧東北大学長町分院と旧広南病院

左側の2階建ての建物に医局、教授室、実験室があつた。渡り廊下を挟んで右側の3階建ての建物に病室、手術室があつた。

なつた。受賞記事が、何故か名前とともに朝日新聞の一面に掲載され、中学校や高校の友達が驚いた。選考委員長は鈴木二郎先生だった。「西畠、いつまでも田舎で脳卒中ばかり診ているな。脳神経外科の病気には、脳腫瘍、外傷、子供の病気などたくさんある。一人前になるためには、東北大学に戻れ」と、授賞式のときに強く勧められた。私は同期6人に遅れること3年半で入局した。昭和52年から54年頃の話。街には「津軽海峡冬景色」が流れていた。

「春の、春の夜も更け、早・・・年。書をひき鉤ひき、学に暮れ」、「今は辛いがいつの日か、花が咲くだろ、学の花」、「今日も、今日も入るか、オペルーム。朝に入って、徹夜して」、「敵は腫瘍かアブツエスカ、行くぞ 敵陣まっしぐら」、「疲れ、疲れこの身を、朝がえり。分かっ

てくれよ、奥方よ」、「掛けてやりたや、優さ言葉、今の俺らにや、ままならぬ」。東北大学脳神経外科の医局歌（元福島県立医科大学脳神経外科教授 児玉南海雄先生作詞）、長町番外地の一節だ。文字どおり不眠不休の丸2年半を医局で過ごした。

「お前には無駄な時間はない」、「専門医も学位も取らせる」、「猛勉せよ」。凄まじい嵐であつた。「真心だけで患者が治せるか?」、「ひたすら患者を診ろ」、「教科書など信用するな」、「早く動物実験を始めろ」、「夢を食って世界に羽ばたけ」。小目玉は数知れず、大目玉を喰らうこと10数回。患者や人前で立ち尽くすこと1時間以上だ。夢の中でも「申し訳ありません」と謝つたらしい。「麻雀、酒は寝ている時間」、「0.5秒の判断が人の一生を決める」、「人との逢瀬は別れ際こそ大切」。人生訓もよく諭さ

れた。「自分の怒りは公憤である。決して私憤ではない」。教室は徹底した徒弟制度の道場だった。先輩後輩のけじめはきちんとしていた。教室の陣容は、高久先生（富山医科薬科大学）、堀 重昭先生（大分医科大学）が新設大学への転出が決まっており、助教授 児玉先生、講師 吉本高志先生、坂本哲也先生は秋田大学への赴任直前、医局長 森 照明先生であった。相原坦道先生（磐城共立病院）、桜井芳明先生（国立仙台病院）、樋口 紘先生（岩手県立中央病院）、小沼武英先生（仙台市立病院）たち諸先生が、非常勤講師として、いつも教室に顔を出して勉強していた。分け隔てのない人間教育は、人を育てるのだろう。教室からは、次の時代を担う脳神経外科医が輩出した。任侠の心意気溢れる人たちが満ちていた。それぞれが医者としての矜持を秘めていた。そして私たちひよっこの医者は、二郎教授の掌でモロトリアムの時代を生きていた。

当時は、専門医を取得すると就職先が決まった。昭和55年、同期7人では、新妻 博、渡邊孝男、田中 悟は東北大学、小川 彰は国立仙台病院、峯浦一喜は秋田大学、岡 伸夫は富山医科薬科大学、私は済生会富山病院で働くことになった。それぞれの道を歩み始めた。

富山へ旅立つ日が近づいた昭和55年8月、私は家族とともに二郎先生のご自宅を訪ねた。「これから富山へ出発します」、「西畠、高久に拾われてよかったな。お前は東北大学では芽が出ない。高久と心中せよ」と激励された。吉本先生に学位論文²⁾を完成してもらって、富山で働き始めた。

富山医科薬科大学時代（30～50 歳）

昭和55年から平成11年の話。私は昭和55年9月、富山に初めて降り立った。東北大学から7人が移り住んだ。そのときまで、富山がどこにあるのかを知らなかった。平成11年に青森県立中央病院へ移るまでの約20年間、私は高久先生のもとで、教室創成の胸弾む青春の日々を過ごした。当時、高久先生が48歳、助教授の遠藤俊郎先生が34歳、講師の岡と私（済生会病院に1年勤めた後、大学勤務）が32歳の、日本一若い教室だった。教室には何もなかった。高久先生は、何もない教室を「Kline aber Mein」と考え、10年後、20年後に思いを馳せ、教室創りを開始した。豪放磊落にして繊細、桁外れた深い愛情の持ち主である先生は、ドスの効いた声で、折につけ、「夢を語れ」、「夢を語ろう」と若い私たちの心に夢を注いだ。「がたがた言うな」、「各自奮励努力せよ」、「肩寄せ合っていこう」、「自然体」、「一点突破」が先生の口癖だった。

た。その頃、大学の近辺に、動物園、ファミリーパークが誕生し、仙台の八木山動物園から「多くの猿」が富山に移ってきた。先生は「妙な親近感があった」と回想している。教室創りは、楽しいものだった。遠藤先生を囲んでは、毎日、「教室はどのようにしたら発展するのだろうか」と話し合った。私は高久組の代貸として、研修病院開拓のために、3回の辞表を書き、新設病院（新設脳神経外科）に赴任した。赴任した病院では、開業医の先生宅を一軒一軒訪問して、脳神経疾患の患者さん集めに奔走した。大学に戻ると、万年講師、出戻り講師、万歳講師（式典の終わりにいつもバンザイ役、嘉山孝正先生の言葉）、医局長の職が待っていた。

教室は高久先生の熱い教育ですくすく育った。登山、野球、スキー、麻雀、囲碁など、実によく遊びよく学んだ。活気ある教室からは次々に仕事生まれ、学問の花が咲いた。新設富山医科薬科大学脳神経外科学教室は、何もないところから出発して、平成8年10月には第55回日本脳神経外科学会総会を富山で開催させていただいた。その後、教室は遠藤先生に引き継がれ、私は青森県立中央病院に赴任した。現在は、第3代目 黒田 敏先生が率いている。私は、最長老として外部から教室を見守っている。

付 記：硬膜動静脈瘻の発見と第1回脳卒中の外科学会賞（鈴木二郎賞）

平成5年、私は「後頭蓋窩硬膜動静脈奇形の組織学検討と治療法についての考察」という論文で、第1回脳卒中の外科学会賞（鈴木二郎賞）をいただいた（Fig. 4）。硬膜動静脈奇形の研究は、東北大学時代から高久先生のlife workの1つだった。その前年から、私は3例の提出標本それぞれから4 μ の連続切片約2,000枚のプレパラートを作成して、毎日組織の観察を続けた。その結果、偶然にも、本疾患では罹患静脈洞の近傍で、硬膜動脈と硬膜静脈の瘻孔が形成されていることに気がついた。この形態が、すべての硬膜動静脈奇形に共通であるか否かは不明だが、少なくとも本疾患の生活史の初期段階には出現する形態であろうと推定した。経動脈の塞栓術後の組織像も観察した結果、硬膜動脈間および硬膜静脈間に豊富な連絡網をもつ本疾患の治療法については、経静脈的または経静脈洞の塞栓術がより有効な治療法であろうと提言した。

本賞は、学会の創始者である故鈴木二郎先生の名前を冠した名誉ある賞であること、前年度の機関誌に掲載された論文の中の最優秀論文に対して贈られるものと知り感激した。高久先生は大層喜ばれた。そのとき言われた

Fig. 4 硬膜動静脈瘻 脳血管撮影（左）と組織像（右）60歳台 女性

この頃、硬膜動静脈奇形（瘻）の本態は不明であった。「血管性の腫瘍ではないか？」とも言われていた。「先天性か？ 後天性か？」についても論争の中にあった。硬膜血管の動静脈瘻を発見した私は、すぐに、30数枚の写真を付けて、*J Neurosurg* に投稿した。Editor は Mayo Clinic の Thoralf Sundt Jr. 先生であった。私は、その数年前に先生のもとに短期の留学をしていた。投稿後すぐに返事があった。「素晴らしい論文である。写真は究極の瘻孔部の組織1枚で十分である。引用文献が足りない。私が示す最近の論文2編を引用文献に加えて、急いで再投稿するように」とのアドバイスであった。すぐに掲載された³⁾。その後、治療法も加えて、脳卒中の外科に投稿した⁴⁾。

教室で血管内治療の猛勉強をしていた桑山直也を子分として、精力的に論文作成、学会発表をした。杏林大学の齊藤 勇先生から、「これは TOYAMA disease」と言われたのを思い出す。桑山は血管内治療医として成長し、指導医として世界を飛び回っている。嬉しいかぎりだ。

ことは、「西嶋、ただちに、二郎先生のお墓に行け。ご報告せよ。帰りには二郎先生の奥様にもきちんと挨拶せよ」だった。先生には、人としての生き方も教わった。

若き neurosurgeon の君たちへ⁵⁾

脳神経外科医の生活は心身ともに多忙である。患者さんや家族との会話では文学の心、実験や論文作成では科学の心、手術では職人としての技術が大切である。これらを矛盾なく統一して、自己の中に修めなくてはならない。脳神経外科の手術では、一瞬の判断が患者さんの人生を左右する。

私の苦い経験、嬉しかった経験から、君たちへ励ましの言葉を贈りたい。

修業時代に心すべきこと

- ①患者さんのためには精いっぱい努力をせよ
- ②よく遊びよく学べ
- ③君は今モラトリアムの中を生きている：やり直しはいくらでもできる
- ④脳神経外科医はスター中のスターである：謙虚にして堂々とし華がなければならぬ
- ⑤論文は青春の思い出：偉くなるために書くのではない

い

⑥先輩は遊んであげよ、後輩は面倒をみよ

⑦春に咲く花、夏に咲く花、秋に咲く花、冬に咲く花：人それぞれに咲く季節は異なる。だから、焦らずに落ち着いて生きよう

以上で、今回の責務を果たしたことにしたい。

文 献

- 1) 水上公宏, 金 弘, 西嶋美知春, 荒木五郎, 美原 博：脳血管障害の臨床—外科治療を中心に—。日本医師会雑誌 78：1-27, 1977.
- 2) 西嶋美知春, 田中 悟, 渡辺孝男, 吉本高志, 鈴木二郎：完全虚血下における脳神経細胞の経時的変化および各種薬剤によるその進行の抑制。Brain Nerve 33：291-299, 1981.
- 3) Nishijima M, Takaku A, Endo S, Kuwayama N, Koizumi F, Sato H, Owada K：Etiological evaluation of dural arteriovenous malformations of the lateral and sigmoid sinuses based on histopathological examinations. J Neurosurg 76：600-606, 1992.
- 4) 西嶋美知春, 桑山直也, 遠藤俊郎, 高久 晃, 小泉富美朝：後頭蓋窩硬膜動静脈奇形の組織学検討と治療法についての考察。脳卒中の外科 20：449-455, 1992.
- 5) 西嶋美知春：若き neurosurgeon の君へ—「北のまほろば」青森から—。脳外速報 21：680-685, 2011.